旧彦根藩井伊家下屋敷の調査

建造物研究室

彦根市松原２丁目に所在する旧彦根藩井伊家下屋敷（現井伊直愛氏住宅）は，文化７（1810）年の創立と伝え，現在約20,000㎡の敷地の南半部に建物群とこれを東，北，西の三方からとり囲む園池が遺存している。建物は一部改造を受けたり，既に取り壊されたものもあるが，遺存状況は概ね良好で、庭園も水が干上って荒廃してはいるが，往時の姿をとどめている。しかも両者が一体として遺存し，江戸から明治への移行期における旧藩主階層の邸宅を知る数少ない事例として貴重である。そのため全体の地形と建物，庭園の地割計画を把握するために敷地全体の平板測量(ＷＩＬＤ　ＲＫ１)を，また建物の現状平面の実測及び復原調査を実施した。

庭園　庭園は敷地の東，北，西端を画す築山と，これに囲まれた池によって構成され，建物群西側の濠によって琵琶湖から導水している。江戸末期の古図によれば，現在は埋められているが敷地南辺に沿う東西方向の濠があり，東端で池からの排水を受けていたらしい。池は延長約150㎡で，微細な谷地形の奥深くまで入りこみ複雑な形状をなす。池の分岐点や谷筋の最奥部には石橋がかけられ，随所に大小の景石を配す。護岸石組には適当な疏密があり，大半は草止めとしている。また現在樹木に埋もれて正確な道筋を辿れないが，池の周囲，築山の稜線及び裾部に石段や飛石，白砂敷の苑路の痕跡を認め，四周を橋を介してめぐる廻遊式庭園であったことがわかる。

現在の広間と，最近とりこわされた書院に北面する部分は池の幅も約30ｍと広く，池中央やや北寄りには東西約８ｍ，南北約３ｍの中島がある。中島の北側には直方体の石材を用いた石橋がかかっている。背後の築山も比較的緩傾斜で，中央やや東寄りの小さなたかまりには高さ約2.5ｍの巨大な立石と灯籠がある。また，池の前面西寄りにも築山を形成し，滝石組や遣水の痕跡がある。

これに対して離れ及び茶室に東面する部分は，築山も急勾配であたかも山中の渓谷をおもわせる。園池の平均幅も約5～8ｍと狭い。

建築　庭園を北に臨んで敷地南半には建物群が配され，伝統的建物11棟が残る。西側の玄関と広間を「表」とし，東側は庫裡と「奥」と称する離れ及び大小の土蔵５棟が建ち並ぶ内向きの場としている。南正面の冠木門は近年撤去されたが，東方の中間部屋，西に接する門番詰所は内部の改造，破損にかかわらず，東に並ぶ土蔵などと共に，往時の屋敷景観を良く伝えている。

玄関は明治22年の建立になり（鬼瓦銘），上り口には大玄関，内玄関，局口の構成に復原される。広間も玄関と同時期の建立と伝えられ，四面に縁を巡らして上手裏に厠を設ける。こうした玄関や広間の平面構成は，維新後，東京麺町に建てられた本宅（大正12年関東大震災焼失）にも類似し，藩政時代からの伝統が受け継がれていたものと思われる。なお広間の東に接して建っていた書院は近年解体撤去されたが古材は保存されている。

庫裡は当下屋敷創立当初の建築と考えられ，西側を台所（御膳所），東側を居室とする。東端から南に張り出した浴室は古風な構えとするが，明治期の補加と考えられる。東北に接続する離れは庫裡と同時期かやや遅れた時期の建築と考えられ，当初は南北棟に二室と，北方上手から西へ延びた角屋に一室を配したものと復原できる。角屋の南には独立した厠を背にした坪庭があったものと思われるが，後にこれを取り囲んで庫裡と接続している。池に臨む東，北面には縁と入側を設け，庭園との一体性が強い建物といえる。　（清水真一・本中　真）

旧彦根藩井伊家下屋敷実測図